

●リウマチ治療の最前線

患者さんの立場に立ち、 寄り添う医療を目指す

大阪府・りんくう橋本リウマチ整形外科



勤務医時代の気付きを活かす

りんくう橋本リウマチ整形外科は、大阪府の南、泉州地区の泉佐野市に2012年7月に開院した。関西国際空港の対岸にあるJR西日本・南海電鉄共用のりんくうタウン駅の改札口を出て、1分以内という立地である。



橋本英雄院長

同院を訪ね、橋本英雄院長に開院の経緯、同院の関節リウマチ（RA）治療、生物学的製剤の使い方など、お話を伺った。

橋本院長は、1990年に大阪大学医学部を卒業し、整形外科に入局、まずRAの基礎研究に取り組み、その後、臨床に入った。大阪労災病院整形外科副部長、りんくう総合医療センター（市立泉佐野病院）整形外科部長を経て、当地に開院した。

「22年間、整形外科医、リウマチ専門医として、病院での診療に従事し、多くのRA患者さんを診てきました。治療は飛躍的に向上しましたが、残念ながらすべてのRA患者さんに同じ医療サービスの質が保証されていません。また、この疾患は医療と完全に縁が切れることがなく、患者さんは、できればずっと同じ先生に診てもらいたいと思っていても、大きな病院では主治医が転勤することがあります。また、患者主体の医療を、といっても小回りが利かないところもあります。

こうした状況のなかで、もっと患者さんに寄り添った医療を提供できないかと思いを巡らせるようになり、また、私自身、RA治療をライフワークとして取り組んでいこうと考えていたことから開業を決意しました」。

同院は、約300平米のワンフロアに、受付、待合室、2つの診察室、処置室のほか、X線室、化学療法室、リハビリ室が設けられている。診察室には関節エコー

が、化学療法室にはリクライニングチェアが2台置かれ、リハビリ室にはウォーターベッドや牽引療法の機器、ホットパック装置なども備えられている。その他、生物学的製剤を使用するRA患者のための迅速血液検査機械、単純レントゲン装置、体幹骨のデキサ法骨密度測定装置なども揃えている。

同院に設置されている機器の間はすべて広めに取られている。これはRA患者を考慮したものだという。

「RAの患者さんは化学療法やリハビリを受ける際、他の患者さんに比べ、移動や衣類の着脱に広いスペースが必要です。勤務医時代、RA患者さんが周囲に気兼ねしていることに気がきました。開業する際は、少しでもRA患者さんが快適に過ごせるようにと考えました」。

現在、スタッフは10名で、医師は橋本院長、RA治療に携わった経験のある看護師4名、放射線技師1名、管理薬剤師兼事務長1名、事務職3名である。

開院直後はほとんどがRA患者だったが、最近、肩の痛みなどを訴えて受診する患者さんも増えている。関節エコーで腱板や二頭筋などの状態を評価し、ピンポイントで注射を行うと痛みが改善し、「今まで治らない痛みと思っていた」と、患者さんが喜ぶので驚くこともあるそうだ。橋本院長は、このように痛みなどに対して治療ができることを知らないまま過ごしているケースがまだまだあることに開院して気付いたという。

RA治療は機能的寛解が可能な時代に入った

RA患者は、現在300人ほど受診している。りんくう総合医療センターから診ている患者さんのほか、地元医師会の開業医からの紹介患者も多い。また、必要があればりんくう総合医療センターへの逆紹介も行い、フォローしてもらっている。これらは勤務医時代からの“顔の見える連携”の賜物だといえるだろう。

橋本院長にRA治療の基本的な考え方を伺った。

「まず早期に診断し、その人に一番合った治療を速やかに開始します。特に初診患者さんなら受診してなるべく早いうちに治療方針を決定し、安心感を与えてあげたいと考えています。患者さんの生活の質（QOL）と日常生活動作（ADL）の向上を第一に、機能的寛解を目指します。そうした治療が大きな病院に行かなくても、患者さんが暮らしている地元地域で受けられることが大事だと考えています」と話す。

1990年代後半に入り、抗リウマチ薬としてメトトレキサート（MTX）が使用可能となり、2000年代には生物学的製剤が登場、RAは薬物療法で機能的寛解が得られる時代に入った。それに伴い、RAの外科手術も大幅に少なくなった。橋本院長が勤務医であった22年間に、このようなRA治療の変革期を身をもって体験したことも開院の動機になっているそうだ。

生物学的製剤は患者さんの立場に立って選ぶ

同院における生物学的製剤の使い方について橋本院長に説明いただいた。

「特に、RA患者さんが一家を支える立場にいる場合は、治療効果の発現を急ぐ必要があります。高疾患活動性で、肩、膝など大きな関節に2つ、3つと腫脹があって受診されたときは、速やかにMTXを導入増量し、効果がなければ生物学的製剤の使用を考えます。現在、当院では6種の生物学的製剤がすべて使用可能ですが、効果発現の早いインフリキシマブ（レミケード®）をまず念頭に置きます。10年来使われてきた薬剤であり、短期間で症状を安定させるのに適していると思っています。当院では化学療法室があるので、初回から外来投与を行っています。10分で結果が出る迅速血液検査機械を使って、当日の全身状態を確認してから、点滴静注に入ります。また、患者さんの要望に合わせて4週に1回の投与で皮下注射のゴリムマブ（シンボニー®）を選択することもあります。これらの生物学的製剤は、どち

らも患者さんの状態に応じて投与量を調節することが重要な薬剤です。

生物学的製剤の選択は、患者さんの立場に立って選ぶべきと考えています。開業すると患者さんが家庭の事情などを以前に比べよく話してくれるようになり、それらも考えに入れて薬剤選択を行うようになりました。6剤ある生物学的製剤を自由に使える立場になったことも勤務医時代とは大きく違い、患者さんにとって何がよいのか、そのつど見極めて薬剤を選択することができます」。

現在、118名のRA患者に生物学的製剤を使用している。なかでも2011年9月に上市されたシンボニー®が30例と一番多いという。

橋本院長に今後のRA治療について何うと「RAは確かに機能的寛解に持ち込めるようになりました。しかし、再燃することもあり、寛解後のフォローも大切だと思っています。高齢化していく患者さんたちのなかには、交通手段が限られているために受診できない方もいらっしゃいます。そうした方たちに向け、定期的な往診や訪問診療も将来的に行っていきたいと考えています。また、専門医として一般開業医の先生へ、生物学的製剤も含めたRA治療のコツを発信できるよう、努めていきたいと思っています」と語った。



スタッフの皆さん



化学療法室



レントゲン室にはデキサ法骨密度測定装置も備えている



リハビリ室